

日本における韓国語学習用テキストの発音表記と学習者

金泰虎

問題の所在

第1章 韓国語学習者の発音学習

- (1) 韓国語学習者の発音学習
- (2) 単純母音と複合母音
- (3) 子音

第2章 「英語発音記号(新)」による韓国語の表記

- (1) 単純母音と複合母音
- (2) 子音

第3章 「英語発音記号(新)」による学習の結果

- (1) テストの対象とその内容
 - (2) 発音と書き取りテストの結果
- 結びにかえて

キーワード: 韓国語、韓国語学習者、韓国語学習用テキスト、国際発声記号、英語発音記号、ローマ字表記法試案

問題の所在

一九八〇年代以降、日本における韓国語⁽¹⁾の学習を目指す人々が一段と増える傾向にある。その原因の一つとしては、まず一九七〇年代半ばから大学で韓国語の講座開設を広げる運動⁽²⁾やNHKの韓国語講座を設けるように働きかけた運動⁽³⁾というように、日本国内における市民

レベルの呼びかけを上げることができる。次いでさらには、アジア大会(一九八六年)とオリンピック(一九八八年)が韓国で開催されるようになったこともあつて、韓国語学習に拍車をかけた。その結果、一九九〇年代には大学において第二外国語として韓国語を採択する学校が増えていることはもとより、塾や会社での学習、個人レッスンなども増えてきているのが実態である⁽⁴⁾。韓国語の学習の熱気は、グローバル化の時代に突入して隣国同士の活発な経済的交流、それに伴う両国間の協力関係を築く必要性から生まれたものと思われる。

このように韓国語の学習者が増える現状に応じて韓国語テキストの数も年々増加している⁽⁵⁾。ところが、これとは裏腹に学習者の発音の正確さが依然として目立っており、聞き取れないことも多い。特に、学習者は母音の、ㅏ、ㅓ、ㅡ、ㅗ、ㅛ、ㅜ、ㅝ、また、子音の平音や激音、つまり、ㄱとㅋ、ㄴとㄷ、ㄹとㄺ、ㄺとㄻに関する発音が正確ではない。この理由は、韓国語学習の熱気にもかかわらず、韓国語の教育法に関する研究の

(1) 拙稿「韓国・朝鮮語検定試験について」(甲南大学・国際言語文化センター報『Zephyr (ゼフィール・にしかぜ)』Vol.6 No2、一九九九年)。ここでは韓国と北朝鮮の対立関係に配慮して「韓国・朝鮮語」としたが、本稿では韓国語と記すことにする。
(2) 玉城繁徳「大学で朝鮮語を」(『季刊三千里』二八号、一九八一年)
(3) 矢作勝美「NHKに朝鮮語講座運動の8年」(『季刊

三千里』三八号、一九八四年)

(4) 大村益夫「大学における朝鮮語教育の現状」(『季刊三千里』三八号、一九八四年)、アルク地球ムック編「韓国語をモノにするためのカタログ」(株式会社アルク、一九九七年)が調査状況を比較して見ると、確かに増えているのが分かる。

(5) 前掲アルク地球ムック編「韓国語をモノにするためのカタログ」で詳しく調べている。

貧弱さが上げられる⁶⁾。すなわち、研究がほとんど行われなかったので、学習者の不正確な発音に対する原因究明が遅れていると言える。

本稿では、日本における韓国語の学習者の不正確な発音はどうして生じるのか、その原因を『書いて覚える朝鮮語』⁷⁾の発音表記を中心に探ることにする。次いでは、その原因究明に基づいて、韓国語の発音に一番近い発音ができる発音表記を考える。さらには、それに基づく学習者に、いかなる効果があったのかをアンケート調査によって検討する。アンケート調査の実施は、関西地域の私学であるK大学で第二外国語として韓国語を受講している学習者を対象に行った。予め、調査のデータが一つの大学に限定されていることを明記しておく。しかし、このデータの分析によるおおよその展望が開かれると思われる。

困みに、外国語の学習方針について触れよう。大まかに言えば、外国語を学習するに当たって発音などは若干間違ってもまずこなしていく方針と、発音などを正確におさえていく方針がある。両者の学習方針に関しては論者によって意見が分かれると思われるが、本稿では前者はさておいて、後者の方針にしたがって発音に限定して論じることとする。

韓国語の正確な発音の学習は円滑な意志疎通だけではなく、言語学的研究や日韓に関わる地名・言葉などの分析などにおいても必要不可欠であり、これまでに置き去りにしてきた感のあるこうした研究が欠かせないものと言えよう。

第1章 韓国語学習者の発音学習

本章では、日本における韓国語学習者の発音

学習の過程や、『書いて覚える朝鮮語』を含む韓国語のテキストに記されている発音表記にはいかなる問題点があるのか把握していきたい。

(1) 韓国語学習者の発音学習

言語を学習するに当たっては、発音は耳で覚えて習得するのが大切である。ところが、教育の現場ではそうはいかない。大学で韓国語を含めて第二外国語として選択している学習者の大半は、明確な目的意識を持たず、卒業単位を満たすために学習しているのが現状であると言える。そこで、積極的ではない学習者には、発音記号をつけながら指導する必要性も生じる。それに加えて、社会人など独学で韓国語を学習する学習者のためにも正確で便利な発音記号の提示が求められよう。

まず、韓国語の学習の第一歩とも言える発音などを、学習者はどのようにして覚えていくのか調べて、その結果に基づいて対策を考えていくことにしたい。そこでK大学の初級韓国語の二つのクラス、合計62人の受講者に協力を得て、次のようなアンケート調査を実施した。この二つのクラスは『書いて覚える朝鮮語』をテキストとしている。但し、この人数は登録者数ではなく、実際アンケート調査に協力した数字である。

(問1) 一人で韓国語の発音を学習する時(復習・試験を含めて)、何を頼りにして覚えていますか。

- ①主に韓国語テキストの発音表記に基づいて学習する。
- ②主に韓国語テキストの発音表記に基づきつつ、教師の発音を参考にする。

(6) 回顧と展望編『日本語と朝鮮語』(上巻、国立国語研究所、一九九七年)では韓国の文学や語学など研究史を整理している。しかし、韓国語の教育に関わる研

究の進展は見受けられない。

(7) 高島淑郎『書いて覚える朝鮮語』(白水社、一九九九年)

(表1) アンケート調査の結果

	問1		問2		問3		問4	
回答①	20人	32.3%	61人	98.4%	0人	0%	52人	83.9%
回答②	31人	50%	0人	0%	0人	0%	10人	16.1%
回答③	9人	4.5%	1人	1.6%	2人	3.2%	0人	0%
回答④	2人	3.2%	0人	0%	60人	96.8%	0人	0%

③主に教師の発音に基づきつつ、韓国語テキストの発音記号を参考にする。

④主に韓国語テキストについているカセットテープを聞いて学習する。

(問2) 韓国語テキストで発音記号が「国際音声記号」⁸⁾とカタカナが併記されているが、一人で発音を学習する時には主にどちらを参考にしていますか。

- ①カタカナ
- ②国際発音記号
- ③カタカナと国際音声記号
- ④その他

(問3) 「国際音声記号」はどのようなもので、記号を見ていかに発音するのか分かりますか。

- ①よく分かる。
- ②ある程度分かる。
- ③見れば少しは分かる。
- ④ほとんど分からない。

(問4) 「英語発音記号」⁹⁾を理解しており、読むことができますか。

- ①理解して読める。
- ②ある程度分かって読める。
- ③ほとんど分からないし、ほぼ読めない。
- ④まったく分からないし、読めない。

このアンケート調査の回答を整理したのが、(表1)アンケート調査の結果である。(表1)の

内容の分析をしていきたい。まず (問1) に対しては62人中の約83%に当たる51人の学習者が①や②と答えた。韓国語学習者のほとんどがテキストの発音表記を頼りにして発音の学習をしていることが分かる。つまり、韓国語テキストの発音表記が学習者の発音と深く繋がっているとと言える。言い換えれば、学習者の発音はテキストの発音表記に左右され、正確な発音の決め手になる。また、一人で学習する時には、教師の指導よりテキストの発音が重視されていることも確認できる。教師の指導の場を離れると、テキストに表記された発音が依り所になると思われる。

一步踏み込んで、(問2)では一人で学習する時、発音表記の中でカタカナと「国際音声記号」とどちらを参考にするかについて、学習者61人の98.4%が前者と答えている。学習者の目がカタカナの表記に集中していることがよくわかる。それで、カタカナ表記を参考にしている理由を把握するために、(問3)で「国際音声記号」に関する質問をしたが、ほとんどの学習者が理解していない。つまり、学習者の間で「国際音声記号」の認知度が低いのである。したがって、カタカナの表記を参考にしている学習者が多いと考えられる。

(問4)ではカタカナと「国際音声記号」以外に「英語発音記号」を知っているかどうかを質

(8) 国際交流基金日本語国際センター編 (「発音」改訂版、凡人社、一九九五年)。「国際音声記号」を取り上

げる。
(9) 『韓英辞典』(民衆書林、一九九六年、韓国)

国際音声記号 (1993年現在)

〔子音(肺気流)〕

	両唇音	唇歯音	歯音	歯茎音	後部歯茎音	ソリ舌音	硬口蓋音	軟口蓋音	口蓋垂音	咽頭音	声門音
破裂音	p b			t d		ʈ ɖ	c ɟ	k ɡ	q ɢ		ʔ
鼻音	m	ɱ		n		ɳ	ɲ	ŋ	ɴ		
ふるえ音	ʙ			r					ʀ		
弾き音				ɾ		ɽ					
摩擦音	ɸ β	f v	θ ð	s z	ʃ ʒ	ʂ ʐ	ç ʝ	x ɣ	χ ʁ	ħ ʕ	h ɦ
側面摩擦音				ɬ ɮ							
接近音		ʋ		ɹ		ɻ	ɰ	ɯ			
側面接近音				ɻ		ɺ	ɺ	ɺ			

(記号が対になっているところでは、右側の記号が有声音を表している。斜線の領域は不可能と判断された調音を示している。)

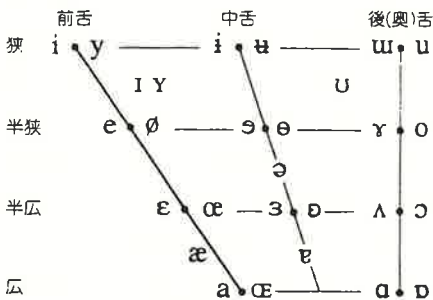
〔子音(非肺気流)〕

吸着音	有声入破音	放出音
○ 両唇音	ɓ	ɔ̥ 以下のように
歯音	ɖ	ɖ̥ 歯音/歯茎音
! (後部)歯茎音	ʄ	ʄ̥ 硬口蓋音
≡ 硬口蓋歯茎音	ɟ	ɟ̥ 軟口蓋音
歯茎側面音	ɠ	ɠ̥ 口蓋垂音
		s' 歯茎摩擦音

〔超分節素〕

- ・ 主強勢 *founə'tʃən*
 - ・ 第二強勢
 - ・ 長音 e:
 - ・ 半長音 e'
 - ・ 特短音 ɛ̃
 - ・ 音節の切れ目 *ni.ækt*
 - ・ 小(韻脚)音群
 - || 大(イントネーション)音群
 - ˘ 連 結(切れ目の欠如)
- 声調および単語アクセント (平声調) (曲声調)
- ・ 特高 ẽ ʌ
 - ・ 高 é ʌ
 - ・ 中 ē ʌ
 - ・ 低 è ʌ
 - ・ 特低 ẽ ʌ
 - ・ 特高 ẽ ʌ
 - ・ 上昇 ẽ ʌ
 - ・ 下降 ê ʌ
 - ・ 高上昇 ẽ ʌ
 - ・ 低上昇 ẽ ʌ
 - ・ 上昇・下降 ẽ ʌ
 - ・ 其他
- ↓ タウンステップ ↗ 全体的上昇
↑ アップステップ ↘ 全体的下降

〔母音〕



(記号が対になっているところでは、右側の記号が円唇母音を表している。)

〔補助符号〕 補助符号は下長記号(ディセンダー部分をもつ記号)の上に付けてもよい。例: ɨ̄

〔その他の記号〕

- ʌ 無声唇-軟口蓋摩擦音
 - ʷ 有声唇-軟口蓋接近音
 - ɥ 有声唇-硬口蓋接近音
 - ħ 無声喉頭蓋摩擦音
 - ʕ 有声喉頭蓋摩擦音
 - ʡ 喉頭蓋破裂音
 - ɕ 齒茎-硬口蓋摩擦音
 - ɺ 齒茎側面弾き音
 - ɥ 同時調音的な ʃ と x
- 破裂音および二重調音は、必要ならば、タイ記号で結ばれた二つの記号によって表される。
k͡p t͡s

・ 無声 ɳ ɖ	.. 息漏れ声 ɓ̥	.. 歯音 ɬ ɮ
˘ 有声 ʂ ʐ	˘ キシみ声 ɓ̥	˘ 舌尖音 ɬ ɮ
h (帯)気 t ^h d ^h	˘ 舌唇音 ɬ ɮ	˘ 舌端音 ɬ ɮ
˘ 円唇化大 ɔ̥	˘ 唇音化 t ^w d ^w	˘ 鼻音化 ẽ
˘ 円唇化小 ɔ̥	˘ j (硬)口蓋化 t ^j d ^j	˘ 鼻音的解放 d ⁿ
˘ 前方化 ɥ	˘ 軟口蓋化 t ^y d ^y	˘ 側面音的解放 d ^l
˘ 後退化 ɨ	˘ 咽頭化 t ^ʕ d ^ʕ	˘ 不可聴的解放 d ^r
˘ 中舌化 ɛ̃	˘ 軟口蓋化もしくは咽頭化 ɬ	
˘ 中段中舌化 ɛ̃	˘ 上昇 ẽ (ɹ = 有声歯茎摩擦音)	
˘ 成節的 ɨ	˘ 低下 ẽ (β = 有声両唇接近音)	
˘ 非成節的 ɛ̃	˘ 舌根前方化 ɛ̃	
˘ r 音化 ɛ̃	˘ 舌根後退化 ɛ̃	

問した。これについて、ほとんどの学習者が理解した上で、発音できるとしている。恐らく、英語が世界共通語のような地位にあるだけに、中学校から学習してきた結果であろう。カタカナ以外に「英語発音記号」を韓国語の発音表記として導入する可能性が浮かび上がる。

以上、韓国語テキストの発音記号が学習者の正確な発音と深く関わっていることが分かった。また、たいいていの学習者は「国際音声記号」の発音記号よりカタカナを主に参考にしており、「国際音声記号」より「英語発音記号」をよく理解していることが明らかになった。この事実は発音記号を考えていく上で重要な手がかりになるものと思われる。

次節では、韓国語の学習者が発音学習に大いに活用している韓国語テキストではどのように発音が表記されているのか、その現状を把握していきたい。

(2) 単純母音と複合母音

現在、日本で出回っている韓国語の学習テキストの大部分は、カタカナや「国際音声記号」に基づく表記をそれぞれ、あるいは同時に採択している⁽¹⁰⁾。ここではK大学が採択している韓国語のテキストである『書いて覚える朝鮮語』を中心に考察したい。この中から韓国語の母音の発音記号をカタカナと「国際音声記号」によって表記して発音の学習をする際、それぞれいかなる問題が生じてくるのか検討してみよう。

まず、母音の発音表記にはどのような問題点

があるのかを、単純母音と複合母音を例として取り上げて見る。前者は一〇個、後者は十一個である。

a. 単純母音 (カタカナ表記)

ㅏ	ㅑ	ㅓ	ㅕ	ㅗ	ㅛ	ㅜ	ㅠ
ア	ヤ	オ	ヨ	ウ	ユ	ー	丨
ウ	イ						

b. 複合母音 (カタカナ表記)

ㅝ	ㅞ	ㅟ	ㅠ	ㅡ	ㅢ	ㅣ	ㅤ
エ	イエ	エ	イエ	ワ	ウエ	ウエ	ウオ
ㅥ	ㅦ	ㅧ					
ウエ	ウイ	ウイ					

単純母音と複合母音の発音をカタカナで表記する場合、いかなる問題が起こるのか。まず、単純母音から見ると、本来異なる発音のㅏやㅑが同じ発音になっている。つまり、ㅏやㅑの音価が[オ]として扱われている。例えば、어이 [オイ] (どうして) と오이 [オイ] (キュウリ) が同音異義語ではない単語であるにもかかわらず、同音異義語として表記されている⁽¹¹⁾。

次はㅓとㅕも同じく同音異義語として記されている。例えば、요구 [ヨグ] (麗句) と요구 [ヨグ] (要求) は同音異義語ではなく、意味の異なる語彙なのである⁽¹²⁾。そしてㅜとㅠも上記の二つの例と同じ傾向の発音表記をしている。例えば、음 (陰) [ウム] の発音が음 (芽) と同じ [ウム] となり、同音異義語になってしまう。

では、複合母音の発音をカタカナで表記すれば、どうなるのか考察する。

(10) 大学の教材としてよく使われている前掲高島『書いて覚える朝鮮語』の他、油谷幸利『朝鮮語入門』(ひつじ書房、一九九九年)、そして塚本勲・奥田一廣『新しい朝鮮語』(白帝社、一九九八年) など

(11) この母音のカタカナ表記にしたがって子音と組み合わせて考えると、発音の不正確さをもっとも明確である。例えば、선동렬 (宣銅烈: 日本で活躍しているプロ野球選手の名前) の名字である宣を [ソン] として

表記する。一方、손정의 (孫正義: 在日韓国人でソフトバンク社長の名前) の名字である孫を [ソン] として表記してㅓとㅕが同音になっている。

(12) 子音と組み合わせて考えると、その差は明確に見える。例えば、겨우 (やつと) [キョウ] と교우 (交友) [キョウ] が同音異義語ではないのに同音異義語になってしまう。

すでに、単純母音のㅏはカタカナでは正確に表記できないことを確認した。したがって、ㅏと絡むㅑも正確に表記ができないのは当然である。一方、本来異なる発音のㅓとㅕの発音がそれぞれ[ウイ]として同じく表記されている。例えば、위사(偽辞)と의사(医師)は両方とも[ウイサ]と表記されることになり、同音異義語ではない二つの単語が、同音異義語になってしまう。複合母音でもカタカナ表記の場合は、ㅑやㅓ、そしてㅕの発音が正確ではないことは明らかである。

このように「書いて覚える朝鮮語」で母音のㅏ、ㅑ、ㅓ、ㅕ、ㅗの発音表記は不正確である。すでに(1)節で確認してきたように、学習者のほとんどが発音の学習においてテキストのカタカナ表記を参考に行っていることから、発音の不正確さは主にテキストによるものと言えよう。

以上の例から単純母音のㅏとㅓ、ㅑとㅕ、ㅗとㅜ、そして複合母音のㅑとㅓの発音をカタカナで表記すれば、同音異義語になってしまう。「書いて覚える朝鮮語」を含む現在日本で出回っている韓国語テキストは、たいていカタカナで表記されており、以上で考察した不正確な発音表記が置き去りにになっている。したがって、韓国語の母音をカタカナ表記に基づいて発音すると不正確になることが多いので、正確な発音を求める上では適切ではない。

では、「国際音声記号」に基づく韓国語の母音表記はどうであろうか。

c. 単純母音 (「国際音声記号」表記)

ㅏ	ㅑ	ㅓ	ㅕ	ㅗ	ㅛ	ㅜ	ㅠ
a	ja	o	jo	o	jo	u	ju
ㅡ	ㅣ						
ㅜ	i						

d. 複合母音 (「国際音声記号」表記)

ㅑ	ㅓ	ㅕ	ㅗ	ㅛ	ㅜ	ㅠ	ㅑ
ε	je	e	je	wa	wε	we	wο
ㅑ	ㅓ	ㅕ					
we	wi	wi					

前節の単純母音のカタカナ表記で不正確な発音として問題のあったㅏ、ㅓの発音表記から見ることにする。「国際音声記号」ではㅏ [ɔ] とㅓ [o] のように区別され、正確に発音が表記されている。例えば、어이 [ɔi] (どうして) と오이 [oi] (キュウリ) である。ほかにもㅑ [jo] とㅓ [jo] も区別ができて、ㅜ [w] やㅑ [u] も正確である。

なお、複合母音のㅑ [wi] やㅓ [ui] も正確な発音が可能になる。したがって、カタカナ表記よりは「国際音声記号」のほうが韓国語の発音に近い。韓国語の学習者が「国際音声記号」を大いに参照すれば母音の発音は正確になると期待できる。

以上、韓国語の母音をカタカナで表記すれば、正確さの問題が生じるのに対して、「国際音声記号」では概ね正確な表記が可能である。

次節では、韓国語の母音と子音を組み合わせて「国際音声記号」やカタカナで韓国語を表記すればいかなる問題が起こるのかを検討していく。

(3) 子音

本節では、「国際音声記号」やカタカナによる子音の発音表記には問題点がないのかどうかを、母音と組み合わせて分析してみたい。「書いて覚える朝鮮語」では「国際音声記号」に基づいて、子音を以下のように表記している。

ㄱ	ㄴ	ㄷ	ㄹ	ㅁ	ㅂ	ㅅ	ㅇ
k	n	t	r	m	p	s	無音
ㅅ	ㅆ	ㅈ	ㅊ	ㅌ	ㅍ	ㅎ	
ㅈ	ㅊ	k ^h	t ^h	p ^h	h		

この表記に基づいた韓国語の学習者の発音からは、平音や激音の部分で違和感が感じられる⁽¹³⁾。つまり「ㄱとㅋ」、「ㄷとㅌ」、「ㅈとㅊ」である。なぜなら、ㄱ [k] とㅋ [kʰ]、ㄷ [t] とㅌ [tʰ]、ㅈ [p] とㅊ [pʰ]、そしてㅈ [tʃ] とㅊ [tʃʰ] は上記の発音表記からすれば、区別することが非常に難しく、学習者には困難が大きい。その端的な例として、平音と激音の「書き取り」を行った場合、正確に書き取れる学習者が非常に少ない(第3章を参照)。なお、学習者が発音する時も、区別が生じない。学習者に次の큰대 [kʰuɳde] (大きい竹) と근대 [kuɳde] (近代)、동일 [toir] (同一) と통일 [tʰoir] (統一)(ここでは、またoと関わる問題がある。동と통におけるoを無音処理することによってさらに元来の発音とは異なってくる。)、비 [pi] (雨) と피 [pʰi] (血)、저는 [tʃʰonun] (私は) 처는 [tʃʰonun] (妻は) といった平音と激音の単語を読ませると区別がつかず、ほぼ同じ発音になってしまう。この他にも「国際音声記号」表記による学習者の発音は、주세요 [tʃusejo] (下さい) 추세요 [tʃʰusejo] (踊って下さい)、대도 [tedo] (大盗) 태도 [tʰedo] (態度) などで、平音や激音と関わる数多くの語彙の区別がはつきりできない状態である。

ところが、『書いて覚える朝鮮語』を含めて、韓国語の学習者が使っているほとんどのテキストでは、「平音が語頭にくる音は濁らなく、語中にくると濁らして発音する」と書かれている⁽¹⁴⁾。대전 (大田：地名) [teʃʌn] 「Taejeon」と김대중 (金大中：韓国大統領の名前) [kimdejuɳ] 「KimDaeJung」などがその例である。このように同じ平音を語頭と語中の位置によって差別化するのは、平音と激音の発音に関する混乱を生

じかねさせない。この語頭の発音記号の付け方はそもそも韓国語をローマ字表記することに基づいているものと思われる。例えば、英語では구미 (亀尾：地名) [kumi] 「Kumi」、대구 (大邱：地名) [tegu] 「Taegu」、부산 (釜山：地名) [pusan] 「Pusan」、제주 (濟州：地名) [tʃeju] 「Cheju」のように、頭にくる平音のㄱを [k]、ㄷを [t]、ㅈを [p]、ㅈを [tʃ] 「ch」として表記する。このようにローマ字表記の場合、語頭の平音を激音に発音するのと、そもそも語頭が激音である単語の区別がつかない。

次いで韓国語テキストではほとんど無音として扱われているoの問題がある。oが母音扱いの発音であれば、間違いなく無音である。例えば、우리 (私たち) [uri] は、oのない우리であつても前者と同じく [uri] と発音されて、意味も同じである。この場合はまさに無音である。但し、文章を作成する時は後者のようには記さず、前者の形で書く。

ところが、次の単語の자소 [tʃaso] からoを取り除くと、자소 [tʃaso] になる。この場合、前者と後者は発音はもとより、意味まで変わってしまう。つまり前者は「場所」であり、後者は「寝て」となる。この場合にはoが無音ではなく、音価があつて、その音価は [ŋ] である。このように子音の「国際音声記号」表記にも問題がある。

一方、カタカナ表記はどうだろうか。同じくㄱとㅋ、ㄷとㅌ、ㅈとㅊ、そしてㅈとㅊに母音を組み合わせてカタカナで表記してみると、「国際音声記号」と同様に発音の不正確さの問題が生じる。例えば、큰대 [クンデ] (大きい竹) と근대 [クンデ] (近代)、동일 [トンイル] (同一) と통일 [トンイル] (統一)、비 [ピ] (雨)

(13) 前掲高島「書いて覚える朝鮮語」一六頁。

(14) 前掲高島「書いて覚える朝鮮語」一〇頁。

と피 [ピ] (血)、저 [チヨ] (私) 처 [チヨ] (妻) といったように平音と激音の区別がつかず、ほぼ同じ発音になってしまう。このようにカタカナ表記はさらに著しい不正確さを避けられないにもかかわらず、学習者の大部分はテキストのカタカナ表記に頼っている。

以上、子音に母音を組み合わせて「国際音声記号」やカタカナで表記した場合、平音と激音の区別が難しいことが確認された。したがって、テキストの発音記号としてカタカナ表記はやめるべきであり、子音の発音を表記する「国際音声記号」も修正が必要である。

次章では、テキストの不正確な発音表記を直し、学習者の正確な発音を促すより韓国語に近い発音表記の可能性を考えていきたい。

第2章 「英語発音記号(新)」による韓国語の表記

本章では、カタカナと「国際音声記号」から生じる発音の問題点を補いつつ、より韓国語に近い発音を可能にしそうな発音表記を探る。その手がかりとして韓国における「日本語の50音」の韓国語とローマ字表記を参考にする。

第1章の学習者のアンケート調査で確認した通り、たいていの学習者が「英語発音記号」を理解している。したがって、「英語発音記号」を基軸にして、より韓国語に近い発音の表記ができる発音記号を、とりあえず「英語発音記号(新)」と称することにしたい。

(1) 単純母音と複合母音

第1章の2節で確認したように、単純母音と複合母音のカタカナ表記は韓国語の発音とかけ離れており、不正確である。一方、「国際音声記号」はほぼ韓国語の母音に相応しい発音ができ

るので、この「国際音声記号」で記せばいいと思う。母音に限っては「国際音声記号」は「英語発音記号」とほとんど共通しており、「国際音声記号」=「英語発音記号」と見なしておく。ところが、ㅡ [w] やこれと関わる ㅣ [wi] の二つは「英語発音記号」にはない。そこで、「国際音声記号」をそのまま表記記号として利用し、これを「英語発音表記(新・母)」と名付ける。したがって、この二つの母音に関しては、英語の発音にはないので、特に注意して学習者に指導する必要があるだろう。

今一度整理すると以下ようになる。

@ 「国際音声記号」 =

「英語発音記号(新・母)」(単純母音)

ㅏ	ㅑ	ㅓ	ㅕ	ㅗ	ㅛ	ㅜ	ㅠ
a	ja	o	jo	o	jo	u	ju
ㅡ	ㅣ						
w	i						

@ 「国際音声記号」 =

「英語発音記号(新・母)」(複合母音)

ㅙ	ㅚ	ㅜ	ㅠ	ㅝ	ㅞ	ㅟ	ㅠ
e	je	e	je	wa	we	we	wo
ㅝ	ㅞ	ㅟ					
we	wi	wi					

この「英語発音記号」という名に拘る理由は、第1章で見てきたように、学習者が「国際音声記号」よりも親近感を覚えているからである。

(2) 子音

第1章の3節で、韓国語の子音の「国際音声記号」やカタカナによる表記では、平音と激音の区別が困難である点はずでに指摘してきた。そこで「国際音声記号」や「英語発音記号」による表記を取り上げて見よう。

@ 「国際音声記号」(子音)

<u>ㄱ</u>	<u>ㄴ</u>	<u>ㄷ</u>	<u>ㄹ</u>	<u>ㄹ</u>	<u>ㅁ</u>	<u>ㅂ</u>	<u>ㅅ</u>	ㅅ	ㅇ
k	n	t	r	m	p	s			無音
<u>ㅍ</u>	<u>ㅑ</u>	<u>ㅓ</u>	<u>ㅕ</u>	<u>ㅗ</u>	<u>ㅛ</u>	<u>ㅜ</u>	<u>ㅠ</u>	<u>ㅡ</u>	ㅇ
f	f ^h	k ^h	p ^h	k ^h					h

「国際音声記号」による表記において問題点のある子音は、アンダーラインを引いた平音と激音である。ここで韓国語により近い発音表記の手がかりとして「日本語の50音」に対する韓国でのローマ字と韓国語の表記に注目したい⁽¹⁵⁾。「日本語の50音」の中で「ㄱとㅋ」、「ㄷとㅌ」、「ㄹとㄹ」、「ㅁとㅂ」、「ㅅとㅆ」に関わる部分だけを引用する。

①ㄱと関わる仮名

日本の仮名： か き く け こ
 英語の発音表記： ka ki ku ke ko
 韓国語の発音表記：카 키 쿠 케 코

②ㄷと関わる仮名

日本の仮名： が ぎ ぐ げ ご
 英語の発音表記： ga gi gu ge go
 韓国語の発音表記：가 기 구 게 고

③ㅌと関わる仮名

日本の仮名： た ち つ て と
 英語の発音表記： ta ti tu te to
 韓国語の発音表記：타 치 쓰 테 토⁽¹⁶⁾

④ㄷとㅌと関わる仮名

日本の仮名： だ ぢ づ ด้ ど
 英語の発音表記： da di du de do
 韓国語の発音表記：다 지 즈 데 도

⑤ㅍと関わる仮名

日本の仮名： ぱ び ぶ べ ぼ
 英語の発音表記： ba bi bu be bo

韓国語の発音表記：바 비 부 베 보

⑥ㅍと関わる仮名

日本の仮名： ぱ び ぶ べ ぼ
 英語の発音表記： pa pi pu pe po
 韓国語の発音表記：파 피 푸 페 포

ここで濁音の仮名②、④、⑤に対して、ローマ字表記としてg、d、bで対応させ、韓国語としては平音のㄱ、ㄷ、ㅍ、ㅌで表記している。また、清音の仮名①、③に対してはローマ字の場合k、tとして表記して、韓国語は激音のㅋ、ㅌで表している⁽¹⁷⁾。つまり、韓国語の平音のㄱ、ㄷ、ㅍ、ㅌは日本語の濁音で発音し、g、d、b、jと表記する。

ところが、「平音が語頭にくる場合は激音に発音し、語中にくると濁音に発音する」日本においては、語頭と語中の平音を差別化する発音方式に沿っている。しかし、いま韓国では英語文化圏の韓国語表記から脱皮する動きが見える。例えば、대우 (大字：韓国の大手企業) をローマ字で「DaeWoo」、두산 (斗山：韓国の企業) をローマ字で「DooSan」、同じく동아 (東亜：韓国の出版社) を「DongA」と表記する。つまり、語頭にくる平音を濁音に発音する傾向が確認できる。

語頭と語中の平音を差別化せず、すべて濁音にするもう一つの理由としては、単語を一つ一つを独立させて使うケースが通常は少ないからである。つまり、単語のほとんどは単語の連続である文章、または会話体の中で使われる。その結果、単語の語頭を区別することができず、連音化の中に単語が埋もれてしまう。したがっ

(15) 朴成媛「標準日本語教本」(進明出版社、一九九三年、韓国)や「日韓辞典」(民衆書林、一九九六年、韓国)など。

(16) 韓国各種の本で「ち」と「つ」の英語表記は、それぞれ [ti] や [tu] と表記している。ところが、韓国語の表記としては「치」・「찌」や「쓰」・「쯔」などに分

かれている。

(17) この場合、ある人は濁音として表記することもたまにある。例えば、「大阪」を普通は오사카と表記するが、오사카と書くケースもある。このような後者の傾向は北朝鮮側の書物でよく見られる。

て、連音化によって頭音と見なす語頭の区別がつかない傾向が強いので、語頭と語中を意識する必要はない。この連音化の現象は分かち書きが基準となるが、この枠を越えて、なお連音化は起こる。例えば「몇 학년」(何年生)は[머탕년]、「할 것이다」(することであろう)は[할꺼시다]のような例がある。語頭と語中が区別されず、すべてを濁音の発音とするのがもともと韓国語の発音に近い。したがって、語中のみならず語頭の平音も濁音に発音したほうが良いと思う。

ところが、ごく最近平音と激音の発音問題に決着をつける発表があった。それは韓国の「国立国語研究院」が発表した「ローマ字表記法試案」である⁽¹⁸⁾。その内容を子音に限定してみると、以上で述べてきたものと同じである。つまり、従来は頭にくる平音ㄱ、ㄷ、ㅂ、ㅍ、ㅈ、ㅊ、ㅌ、ㅍ、ㅊとローマ字表記してきたが、今後はg、d、b、jに改めるということである。

「ローマ字表記法試案」では、実例を上げて대구(大邱:地名)を従来は「Taegu」とローマ字表記してきたが、このローマ字表記通り韓国語で発音すれば、대구となって대구ではない正体不明の都市が誕生する。したがって、今後は「Daegu」[대구]と表記するとしている。他にも부산(釜山:地名)を「Pusan」[부산]ではなく「Busan」[부산]に、そして、제주(濟州:地名)を「Cheju」[제주]ではなく「Jeju」[제주]のように表記して、実際の韓国語の発音に近い発音に改めるとする。「国立国語研究院」の方針に基づいて子音をローマ字表記すれば以下ようになる。

@ローマ字表記(子音)

ㄱ	ㄴ	ㄷ	ㄹ	ㅁ	ㅂ	ㅅ	ㅇ
g	n	d	l,r	m	b	s	ng
ㅈ	ㅊ	ㅋ	ㅌ	ㅍ	ㅑ	ㅓ	
j	ch	k	t	p	h		

これに基づいて、もう一度「英語発音記号」に書き直せば、以下の通りである。

ㄱ	ㄴ	ㄷ	ㄹ	ㅁ	ㅂ	ㅅ	ㅇ
g	n	d	l,r	m	b	s	ŋ
ㅈ	ㅊ	ㅋ	ㅌ	ㅍ	ㅑ	ㅓ	
ɟ	tʃ	k	t	p	h		

では、「国立国語研究院」が発表した「ローマ字表記法試案」を「英語発音記号」に直したもののには、ㅇに関する発音表記が十分ではない。したがって、ㅇについて[ŋ]だけではなく、無音を併記する。このようにしたものを「英語発音記号(新・子)」と称したい。

@「英語発音記号(新・子)」(子音)

ㄱ	ㄴ	ㄷ	ㄹ	ㅁ	ㅂ	ㅅ	ㅇ
g	n	d	l,r	m	b	s	無音,ŋ
ㅈ	ㅊ	ㅋ	ㅌ	ㅍ	ㅑ	ㅓ	
ɟ	tʃ	k	t	p	h		

この「英語発音記号(新・子)」と「英語発音記号(新・母)」を合わせて、「英語発音記号(新)」と称し、韓国語の発音記号としたい。以下で取り上げておく。

@「英語発音記号(新)」

・単純母音

ㅏ	ㅑ	ㅓ	ㅕ	ㅗ	ㅛ	ㅜ	ㅠ
a	ja	o	jo	o	jo	u	ju
ㅡ	ㅣ						
w	i						

・複合母音

ㅘ	ㅙ	ㅚ	ㅜ	ㅝ	ㅞ	ㅟ	ㅠ
ε	jε	e	je	wa	we	we	wɔ

(18)「朝鮮日報」(1999年11月18日、韓国)

ㅁ ㅂ ㅅ
we wi wi

・子音

ㄱ ㄴ ㄷ ㄹ ㅁ ㅂ ㅅ ㅇ ㅈ ㅊ ㅋ ㅌ ㅍ ㅎ
g n d l,r m b s 無音,ŋ
스 스 ㅍ ㅍ ㅍ ㅎ
ㄷ ㅍ ㅋ ㅌ ㅍ ㅎ

これに加えて、スとスに限っては韓国語の子音を覚える際に、韓国の「国立国語研究院」が発表したローマ字表記も併用すれば学習者の理解が早く、現地音に近い発音ができると思う。例えば、제주도(濟州島：地名)を [dʒeɟʌdʌdo] ではなく [ˈjejuːdo]、また차(茶、車)を [tʃa] ではなく [ˈtʃa] と学習できるようにするのである。

以上、「国際発音記号」の問題点を補いつつ、韓国語に一番近い発音を目指して「英語発音記号」の再配置による表記を試みた。学習者が頼りにしているテキストで発音の不正確さが目立つカタカナ表記と、子音において若干発音の問題がある「国際音声記号」を取りやめて「英語発音記号(新)」を提示したわけである。次章では、本章で提案した発音表記の「英語発音記号(新)」と従来の韓国語テキストの発音表記に依拠して学習した学習者を対象にして、それぞれ発音や書き取りのテストを行ったのでその差を比較検討することにしたい。

第3章 「英語発音記号(新)」による学習の結果

本章では、『書いて覚える朝鮮語』(従来の発音表記)で学習した学習者と、第2章の「英語発音記号(新)」に基づく学習した学習者との間の発音・書き取りの能力を比較して調べることにする。

(1) テストの対象とその内容

テストはK大学の初級韓国語の二つのクラスを対象にした(初級クラスは従来の発音表記に基づいて学習するクラスと、「英語発音記号(新)」に基づいて学習する二種類のクラスである)。二つのクラスは通年の授業であり、半年間学習して韓国語の発音をマスターした段階の学習者である。この二つのクラスはそれぞれ発音表記に対する異なる体系、つまり従来の発音表記で学習したクラス(Jクラスと称する)と第2章で取り上げた「英語発音記号(新)」で学習したクラス(Aクラスと称する)である。対象人数はJクラスが32人、Aクラスが29人である。両クラスとも再履修の学習者はいない。但し、この人数は登録者数ではなく、テストに出席した学習者の数である。

「発音」と「書き取り」の問題から共通的に言えるのは、すでに触れてきた発音表記における問題点のある子音や母音と関わる単語及び文章を中心に出题した。つまり、母音はㅏやㅑの発音、そして子音は平音のㄱ、ㄷ、ㅂ、ㅅとそれと関わる激音であるㅃ、ㅆ、ㅈ、ㅊを取り上げた。その内容は以下の通りである。

* 発音

- ① 배를 탄다.(船に乗る。)
- ② 카누를 즐긴다.(カヌーを楽しむ。)
- ③ 자리가 비좁다.(席が狭い)
- ④ 어디로 갈까?(どこへいこうか。)
- ⑤ 대전에는 친척이 산다.(大田には親戚が住む。)
- ⑥ 파가 비싸다.(ネギが高い。)
- ⑦ 워낙 무거워 들 수 없다.(あまりにも重くて持ち上げることができない。)
- ⑧ 태산은 큰 산이다.(泰山は大きな山だ。)
- ⑨ 가방을 들고 간다.(カバンをもって行く。)

⑩차레 차레로 올라 가자.(順々に登ろう。)
この「発音」に関するテスト内容の作成に当たっては、教材として採択している韓国語テキスト以外から文章を出題した。学習でいかに応用して正確な発音をすることができるかを判断するためであった。学生を一人ずつ個別面談の形式をとって行った。

*書き取り

- ①부부 (夫婦)
- ②커피 (コーヒー)
- ③주세요 (下さい)
- ④어머니 (母)
- ⑤다리 (足、橋)
- ⑥피 (血)
- ⑦더워요 (暑いです)
- ⑧토지 (土地)
- ⑨그리고 (そして)
- ⑩처음 (初めて)

以上の「書き取り」に関するテスト内容の作成に当たっては、テキストの『書いて覚える朝鮮語』の中から単語を選び出して出題した。つまり、すでに学習した単語である。韓国語を学習し始めて半年くらいで、語彙力や聞き取り能力が十分でない状態を考慮したからである。テストに当たっては、文章を3回ずつ読み上げた。

(2) 発音と書き取りテストの結果

本節では、発音と書き取りのテストから得られたデータの分析を行うことにする。

「発音」と書き取りのテストの結果をまとめたのが、(表2)「発音」の正読率と(表3)「書き取り」の正答率である。

なお、この(表2)「発音」の正読率と(表3)「書き取り」の正解率をグラフで示したのが、(図1)「発音」と(図2)「聞き取り」である。

J・Aクラスの状況を比較しやすいように、それぞれの項目の正解率を重ねて見た。

このグラフから分かるのは、AクラスのほうがJクラスより、「発音」と「書き取り」ともに全般的に成績がよい。もう少し細分化して「発音」と「書き取り」を対比して見ると、直接文字を見て読むよりは「書き取り」のほうが難しかったと判断される。なぜなら、「書き取り」は聞き取りと連動しているので、聞き取りの学習経験が豊かではない初級の学習者においては予想できる結果である。さらに、「書き取り」は聞き取りと連動していることもあって、不正確な発音表記をもとにして発音の学習をしたJクラスのほうが、あまり書き取れなかったのは当然の帰結だったのかも知れない。

因みに、ここでテストに加わった学習者の出席率を比較しよう。出席の状況は、Aクラスの場合、総29人のうち90%の出席率が24人で86.2%、70%から90%の出席率が4人で13.8%、そして60%以下が1人で3.4%である。一方、Jクラスは32人のうち90%の出席率が27人で84.4%、70%から90%の出席率が3人で9.4%、そして60%以下が2人で6.2%である。

まず、「発音」のテストからAクラスを分析すると、9割以下の出席率は合わせて17.2%であり、これは全問平均誤読率の14.1%とほぼ合致している。出席と相関関係にあると言える。一方、「書き取り」は全問平均誤読率が約半数の43.1%に達しており、これも出席率とも連動はしているものの、聞き取りの未熟さが目立っている。

次は、Jクラスであるが、「発音」や「書き取り」ともに出席率との連動を論ずるのが難しく、不正確な発音の影響以外に原因が考えられない。なお、「書き取り」は、Aクラスの場合もその弱さが指摘できる。ここで、書き取りと関

(表2)「発音」の正読率

* Jクラス (32名)

問題	正読者数	正読率
①	15	46.9%
②	16	50.0%
③	20	62.5%
④	11	34.4%
⑤	10	31.3%
⑥	14	43.8%
⑦	11	34.4%
⑧	13	40.6%
⑨	19	59.4%
⑩	10	31.3%
全問平均正読率		43.5%
全問平均誤読率		46.5%

* Aクラス (29名)

問題	正読者数	正読率
①	23	79.3%
②	24	82.8%
③	26	89.7%
④	20	69.0%
⑤	19	65.5%
⑥	24	82.3%
⑦	21	72.4%
⑧	24	82.4%
⑨	22	75.9%
⑩	20	69.0%
全問平均正読率		85.9%
全問平均誤読率		14.1%

(表3)「書き取り」の正答率

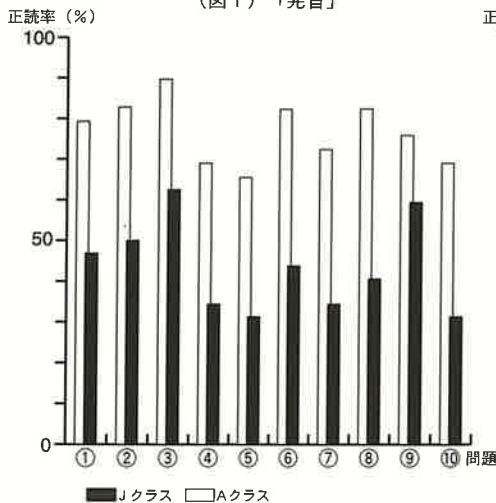
* Jクラス (32名)

問題	正解者数	正解率
①	11	34.4%
②	8	25.0%
③	9	28.1%
④	7	21.9%
⑤	10	31.3%
⑥	12	37.5%
⑦	6	18.8%
⑧	10	31.3%
⑨	7	21.9%
⑩	6	18.8%
全問平均正解率		26.9%
全問平均誤解率		73.1%

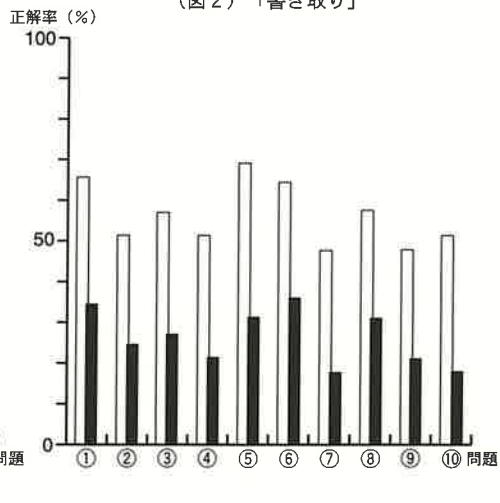
* Aクラス (29名)

問題	正解者数	正解率
①	19	65.5%
②	15	51.7%
③	17	58.6%
④	15	51.7%
⑤	20	69.0%
⑥	19	65.5%
⑦	14	48.3%
⑧	17	58.6%
⑨	14	48.3%
⑩	15	51.7%
全問平均正解率		56.9%
全問平均誤解率		43.1%

(図1)「発音」



(図2)「書き取り」



わる聞き取りの訓練の必要性や、高い出席率を求めることが重要であることが分かった。

もっと具体的に見ていくと、学習者は「発音」の④と関わる ㅈ を ㅊ と誤読することが多かった。すなわち、正読率はAクラスが69.0%、Jクラスが31.3%で10問の中で一番低く、それぞれの全問平均正読率を下回っている。また、Jクラスの学習者の大部分が ㅈ を ㅊ に発音する習性が高いことも発見した。この原因は従来の発音表記の影響かと思われる。「書き取り」でも、同じくこのような傾向が強い。

そして、Jクラスでは平音と激音の区別ができない学習者が多かった。つまり、ㄱ と ㅋ、ㄷ と ㅌ、ㄴ と ㄹ、ㅅ と ㅆ がそれぞれである。これを裏付けるのが、(図1)「発音」のグラフの黒い棒である。

このように、従来の韓国語テキストに基づいて学習したJクラスと、「英語発音記号(新)」によって学習したAクラスとでは、後者のAクラスが「発音」と「書き取り」の両項目でJクラスより優れていることが明らかになった。しかし、「英語発音記号(新)」が正確な発音には有効ではあるものの、書き取りの部分では発音より低い水準なので、さらなる教育方法の研究が必要と言える。

結びにかえて

以上、考察してきたように韓国語の学習者は発音学習をする上で、テキストに書いている発音表記を多く参考にしながら学習していることがわかった。その状況からみると、テキストの発音表記は学習者の発音を左右するものであると言える。

ところが、本稿で取り上げた韓国語のテキスト「書いて覚える朝鮮語」では、カタカナと「国際音声記号」による二つの表記をしているものの、正確な発音とはほど遠く問題が大きなことが確認できた。まず母音に関して、カタカナ表記は ㅏ、ㅑ、ㅓ、ㅕ、ㅗ、ㅛ、ㅜ、ㅝ に関して正確な発音を表せない問題点があった反面、「国際音声記号」は正確であった。

一方、子音は ㄱ と ㅋ、ㄷ と ㅌ、ㄴ と ㄹ、ㅅ と ㅆ の平音と激音に対してはカタカナも「国際音声記号」も、共に両音の区別が難しい表記になっている。これによって、学習者の母音の ㅏ、ㅑ、ㅓ、ㅕ、ㅗ、ㅛ、ㅜ、ㅝ、また子音の平音や激音、つまり ㄱ と ㅋ、ㄷ と ㅌ、ㄴ と ㄹ、ㅅ と ㅆ に対する不正確な発音が生まれてきたと思われる。

そこで、韓国語により近い発音表記の提示を試みて「英語発音記号(新)」を導入し、「英語発音記号(新)」表記に基づくクラスと従来の方式で学習した学習者を比較してアンケート調査を実施した。その結果、従来の発音表記によって学習した学習者より、「英語発音記号(新)」表記に基づいて学習した学習者のほうが発音と書き取りの両方ともに高い成績が得られた。

もともと「英語発音記号(新)」表記の提案も完璧なものではなく、なるべく韓国語に一番近い表記を当てただけである。これより正確な発音であり、かつ理解しやすく、意志疎通の上で誤解を招かない発音表記の開発の努力が求められる。

今後、日韓の学者が同じテーブルで向かい合って、以上の諸問題を含めて両国間に通用するより正確な発音表記について議論することが必要であろう。本稿は、そのような会合に向けての手がかりになるものと思う。